

1.

1964年、夏。

秋に運転開始を目指して訓練を続けている雷鳥としらさぎは、福井県との県境にほど近い大聖寺駅にいた。なにやら用事があるからと、上の人間に呼びつけられたのだ。

南中を回った太陽が容赦なく照りつけ、ホームに設けられた屋根がそれを遮ってくれなければ、あつという間に焦げてしまいそうなほどの天気だった。

「おい、ここに何の用事があるんだよ、しらさぎ」

「私に訊かないでよ。上からの命令なんだから、仕方ないじゃん」

この大聖寺駅には、石川県の私鉄である北陸鉄道の駅もある。北陸鉄道はいくつか路線を持っていたが、ここはそのうちの一つであり、駅から南東の方向にある温泉地、山中温泉へと繋がる路線だ。その名を加南線と言った。

「おまえたち、何しに来た！ここは、おれたちのホーム

だぞ」

そして、休憩している雷鳥としらさぎの目の前に現れたのは、一人の少年だった。すでに成人して久しい雷鳥やしらさぎと比べて、少年はまだ中学校にも上がっていないのではないかと思えるくらい、細くてひよろりとした身体だった。そして、その身体は赤と白を基調とした制服で包まれている。

「別に怪しいものじゃないって。なあ、しらさぎ」

「そうそう、私たちは今年の秋から北陸本線を走るとさぎゅ……」

「しらさぎだつて!？」

しらさぎの言葉を遮って、少年は素つ頓狂な声を上げた。今雷鳥としらさぎが発した短い言葉のどこに、彼をそこまで驚かせる要素があったらどうかと顔を見合わせていると、少年は言葉を続けた。

「しらさぎは、おれの妹だ！」

「はあ？」

今度は二人が驚きの声を上げる番だった。雷鳥などまじまじとしらさぎの方を見て、おまえ女だったのかとふざけたことを言ったので思いつきり睨んでおいたのだが、気にかかるのはこの少年の言葉だった。

そのとき。

「こら、くたに!!お客さんに向かって失礼だろう!」

大きな怒鳴り声とともに駅舎の中から現れたのは、初老の男性だった。この暑い中、三つ揃いのスーツに身を包んだ彼の傍らに、一人の少女の姿があった。くたに、と呼ばれた少年と同じ頃の見えるその少女は、真っ白のワンピースを身につけている。

「うちのくたにが大変失礼致しました」

男性は雷鳥としらさぎの前にやってくる、深々と頭を下げた。そして、隣でふくれっ面をしているくたにの頭に手を置き、無理矢理頭を下げさせる。くたにもこの男性には頭が上がらないのか、仏頂面しながらも大人しく従っていた。

「おにいちちゃんたら、お客さんを困らせるのが一番だめだつて、習つたじゃない」

「こいつらはおれたちに乘らないから『お客さん』じゃねーよ」

「こら!」

再び男性の雷がくたにに落ちる。そんなやりとりを目の前で繰り広げられた雷鳥としらさぎは、あつけにとられた様子でぼかんとただ見ていることしか出来なかつた。

そんな彼らの後ろに、国鉄の普通列車が滑り込んできた。がたがたと音を立てて扉が開くと、ばらばらと客が

降りてくる。その中に見知った顔を見つけて、雷鳥が手を上げた。

「こつちです」

それは、雷鳥としらさぎをこの大聖寺駅に呼びつけた張本人であり、彼らの上司にあたる男だった。悪い悪い、と額に浮かぶ汗をハンカチでひっきりなしに拭いながらこちらへ駆けてくる。

「この度はわざわざこのような場所までご足労いただきまして申し訳ございません」

上司に向かって、初老の男性が再び腰を折る。いえいえ、車両の都合がありますから仕方ありませんと表面上は穏やかな言葉を吐く上司だったが、雷鳥としらさぎには面倒くさがっている様子が見え見えだった。そもそも、本当に大切な用事であればこんな全員が揃った段階でやってくるなどしなはずだ。

「今度の秋から、この駅に停車します『雷鳥』と『しらさぎ』です」

汗を拭う手を止めることなく、上司は男性に雷鳥としらさぎを紹介した。二人はその言葉に合わせてぺこりと頭を下げる。雷鳥が代表して、若輩者ですがよろしくお願ひします、と挨拶をした。

「これはこれは。国鉄の特急に停車していただければ、

わたしのたからもの

より多くのお客さんに利用してもらえます。こちらは、我が社の看板列車となります、『くたに』と『しらさぎ』です。この大聖寺駅から終点の山中までを結んでおります」

男性に促されて、くたにとしらさぎは三人に向かって頭を下げた。

「同じ名前とは、奇遇ですなあ」

「山中温泉は白鷺にまつわる伝承がありますもので。それに、この子の車両はアルミ製で真っ白なものですから、しらさぎと名付けた次第です」

上司と男性はこれからダイヤ等について具体的な話があるからと言って駅舎の方へ歩いて行ってしまった。どうやら雷鳥としらさぎの役目はこれで終わりらしい。時計と時刻表を見比べれば、ちょうどダイヤの薄い時間帯で、次の金沢方面への列車は三十分以上来ないということが分かった。つまり、この暑い中しばらく待たねばならないということだ。

初老の男性に置いて行かれた「くたに」と「しらさぎ」もまた、どうすればいいのかわからないと言った様子で、辺りをぎよろぎよろと見回していた。

その時、何者かがしらさぎの制服をちよいちよと引つ張っていることに気がついた。顔をそちらに向けてると、

白い服を着た「しらさぎ」がいつの間にかすぐ側にいた。

「どうしたんだい？」

なるべく丁寧に、怖がらせないようにとしらさぎは少女の方へと向き直り、屈んで視線を合わせる。まだ幼さの残る少女はじつとしらさぎの方を見て、そして口を開いた。

「しらさぎって名前なの？」

「そうだよ。君もしらさぎなんだよね」

「そうよ。しらさぎ。おにいちちゃんはくたによ。九の谷って書くの。わたしはひらがなだけ」

はつきりとした自己紹介だった。第一印象から静かな子だと思っていたが、どうやらそうでもないらしい。

「君はここに来て長いの？」

「去年来たの。まだ一年と少しだけ」

「それでも私よりは長いね」

先輩だな、と言えば、その言葉がわからないらしく、不思議そうな顔でしらさぎを見ている。

「ああ、先輩っていうのは、うーん、そう、お姉さんって意味だ。走り始めたのは君の方が先だから、私よりも先輩、お姉さんになるってこと」

「変なの。だってあなたは大人なのに」

「大人ってのは変なものなのさ、お嬢さん」

くすくすと笑う少女の頭を撫でる。さらりと細い髪の毛が手の表面を滑つては下へと落ちていく。

「あー！こら！しらさぎに触るな！」

それに気づいたくたにが、ものすごい勢いでこちらに向かつて駆けてくると、えいっとしらさぎの身体を蹴った。それは大した威力ではなかったけれど、その時のしらさぎは屈んだ体勢で、かつしらさぎの頭を撫でるために体重が前側に掛かっている状態だった。そんな状態で勢いよく蹴りつけられては、バランスを崩さない方が難しい。

ドタン、と派手な音とともに、しらさぎはホームの上で横転した。

「しらさぎ！何やつてるんだお前！」

くたにに蹴られるところは見ずに、転ぶ瞬間だけを見たらしい雷鳥が、大笑いしながらこちらへ近づいてくる。そして、倒れたままのしらさぎに手を差し出した。ありがたくそれに捕まって身体を起こすと、くたにがしらさぎの前に立ちはだかり、妹をかばうようにして身体を大の字に広げていた。これでは兄と言うよりも、お姫様を守る騎士のようだ。

「おにいちちゃん！」

後ろからしらさぎが非難の声をあげていたが、少年は

なおもしらさぎの事を睨め付けている。余程嫌われたらしい。

「子供からかって遊ぶなよ、しらさぎ」

「遊んでないよ。向こうが勝手に……いててて」

転んだ際にコンクリートに打ち付けた部分が痛い。さすりながら顔をしかめていると、しらさぎが心配そうな顔でこちらを見ていたので、大丈夫だと軽く手を挙げておいた。

「いくぞ、しらさぎ！」

くたには妹の手を取ると、先ほど初老の男性とやつてきた建物の方へ向かって駆けていった。少女は引きずられるような格好で少年の後ろを走る。名残惜しそうにこちらを見るしらさぎの方へ、ひらひらと手を振っていたら、背後から雷鳥に肩を叩かれた。

「お前、ああいうのが趣味なのか？」

「違うよ。でも子供は可愛いじゃないか。純粋で」

「まあな。でもあのくたにつてガキは論外だな」

「それには同意するよ」

いきなり蹴られたしな、としらさぎが愚痴をこぼせば、とんだガキだなと雷鳥が笑う。しかし、妹のことを必死に守ろうとするその姿勢は嫌いじゃないと思いつながら、しらさぎは彼らが消えた建物の方向に視線を巡らせた。

わたしのたからもの

「おにいちちゃん！おにいちちゃんってば！」

捕まれた手を無理矢理振り解くと、しらさぎはぐつと足に力を入れてその場に立ち止まる。くたには勢い余つて少し先へ進んだものの、再びしらさぎの元へ戻つてきた。

「何を怒つてるんだ、しらさぎ」

「他の人を蹴つたり殴つたりしたら駄目って言われてたのに！」

「あいつが悪いんだぞ。しらさぎに触つたりするから！」
おまえは可愛いから、知らない人について行つたら帰つてこれなくなると言ってくたにの目は真剣そのものだった。いったい誰にそれを吹き込まれたのか分からないが、とにかく真面目にしらさぎの身を案じてくれている事だけは分かつたので、しらさぎもそれ以上強く言うのは止めた。

「しらさぎさんたちは、秋から大聖寺に停まる特急なんだから、『目上の人だと思つて接しなさい』って言われたの、忘れたの？」

「そりやそうだけど……」

「もごもごと口ごもるくたにに、しらさぎはため息をつ

いた。

しらさぎよりも一年早くここにやってきて、ロマンスカーとしての運転を始めた「くたに」は、しらさぎのことをそれはそれは可愛がつてくれた。一人ぼっちだったところへやつてきた妹を何より大切に思つてくれていたことはしらさぎも分かつていたし、そんな兄が好きだった。けれど、一年経つてその行動がちよつと行き過ぎたんじゃないかと思うようになってきたのも事実だ。

走り始めてもう一年、ようやく自分の役割の何たるかを知り、楽しくなつてきた頃合いだ。知り合いも増えたし、お客さんや乗務員問わず声を掛けてもらえるようになった。しかしそれにいちいち目くじらを立てている兄を鬱陶しく思うこともままあつた。

「わたしだつて、もう一年たつたのよ？ちゃんと走れるもの。それに、知らない人について行くことを心配されるほど、子供じゃないわ」

自分自身で子供ではないと言いつけることこそが子供なのだが、しらさぎはそこまで考えていなかったし、くたにもまた兄とはいえ一つしか変わらぬ年齢だつたので、そんなものかと納得してしまつた。

「……分かつたよ。でも、ちゃんと気をつけるんだぞ！」

特にあの国鉄のしらさぎには」

「どうして？」

「どうしてもだ！」

なぜくたにがあのにしらさぎをそこまで目の敵にするのか気になって、何度か訊ねたものの、結局くたには一度もその理由を教えてくれなかった。

その後、山中と大聖寺の間を一往復だけ走って、しらさぎは車庫に戻ってきた。今日は平日だからか、乗客は観光目的の人よりも地元の人が多かった。一年の間につきかり顔なじみになったおばあさんが乗ってきたので挨拶をすると、列車から降りる間際、しらさぎの手に大きなあめ玉を二つ乗せて、

「おにいちゃんと食べなさいね」

そう言つて降りていった。こんなことがあるから、しらさぎは自分の仕事が好きだった。

そして、これからはもつと楽しくなるような、そんな気がしていた。国鉄の特急が大聖寺に止まるようになれば、遠くからもつともつとお客さんが来てくれるようになるだろうし、駅で雷鳥やしらさぎと会える。くたにがどう思おうと、顔見知りが増えるのはしらさぎにとつて嬉しいことだった。

車庫から歩いて部屋のある建物に戻る。くたにはまだ帰ってきていないのか、建物はしんとしていた。

暗くなつてからこの建物に一人でいることだけは、まだ慣れない。賑やかな場所に慣れてしまつたからか、一人がたまらなく寂しく思えた。

しらさぎは居間に置かれたラジオのスイッチを入れると、部屋の隅に膝を抱えて座つた。スピーカーから陽気な音楽が流れ出す。わずかにノイズの乗つたラジオの音が、しらさぎの寂しさを紛らわせてくれた。

「……早く秋になればいいのに」

しらさぎは、今度の秋から走り始めるのだと言つていた。早くその日が来ればいいのにと考えているうちに、小さなしらさぎは膝を抱えたまま、その場で眠つてしまつた。

2.

季節は巡って、冬になった。

国鉄のしらすぎは約束を守れなかった。本当は十月一日に走り始める予定が、専用車両の準備が遅れたのだ。

結局走り始めることが出来たのは、当初の予定から三ヶ月近く遅れた、十二月二十五日だった。

その日、小さなしらすぎは自分のホームから大きく身体を乗り出し、ホームの端の方をじっと眺めていた。ようやく、国鉄のしらすぎがこの駅にやってくる。秋に来られなくなったと聞いたときは本当にがっかりしたのだが、ようやく走り始める日が決まったと連絡を受けてからというもの、今日のこの日を指折り数えて待ち焦がれていたのだ。

ちらちらと雪がちらつく中から、まぶしいくらいに明かりがちらへ向かって動いてくるのが見えた。それは見る間に近づいてきて、しらすぎの前にはつきりと姿を現した。

同じ名を名乗っているというのに、国鉄のそれはしらす

さぎの車両とは似ても似つかぬものだった。色も白くないし、形も違う。何よりたくさんの車両が連なっていて、とても長いのだ。二両しかないしらすぎの車両とは規模が全然違う。

驚きの目で見ていると、先頭車に花輪を付けたその車両が聖寺駅にびたりと停車した。ヘッドマークは白地に青い文字で「しらすぎ」と書かれている。

ドアが開き、大きな鞆を持った大勢の乗客が大聖寺駅のホームに降り立った。と同時に、しらすぎがいる方——北陸鉄道への乗り換え改札の傍だ——に向かって歩いてくる。皆しらすぎの車両に乗って、温泉へ行くのだらう。

普段の休日だって、こんなに大勢の乗客が一度にやってくるなどあったらどうか。驚きの眼差しでその光景を見ていると、後ろから肩を叩かれて飛び上がった。

「ひゃっ！」

「おお、すまない、驚かせるつもりはなかったんだ」

その声は、小さなしらすぎにとって聞き慣れた馴染み深い声だった。初老の男性——この加南線の責任者だ——は大勢の乗客を見て、覚えておきなさい、としらすぎに言った。

「何をですか？」

「国鉄の特急が停車するというのは、こういうことなんですよ。普通電車だけが停車していた頃とは乗客の数が大きく違うでしょう？彼らもこれから本数が増えるだろうし、そうなればより多くのお客さんを運んできてくれます」

それを聞いて、そうなのかとただ純粹に思ったしらさぎだった。しらさぎには男性が言うような難しいことは分からないけれど、とにかくしらさぎや雷鳥がこの駅に停車してくれるのは喜ばしい事なのだとしたことだけは分かった。

しらさぎと男性が次々と乗り換え改札を通っていく乗客を見ていると、国鉄側のホームから黒いコートに身を包んだ男が近づいてくるのが見えた。

「しらさぎさん！」

小さなしらさぎはそう言うや否や、身体を預けていたホームの境をひらりと飛び越え、国鉄側のホームに降り立つと、国鉄のしらさぎに向かって走っていく。しかしあまりに勢いよく走りすぎたせいで、手前で止まることが出来ずそのまま勢い余って国鉄のしらさぎのコートにぼすつと身体ごと突っ込んでしまった。

「大丈夫？」

ようやく止まったしらさぎの身体を、国鉄のしらさぎ

はそつと離し、この前の夏の日と同じように膝を折って目線を合わせてくれた。そして、痛めたところがないかと気遣つてくれる。

「ごめんなさい……」

「気にしなくていいよ」

そう言つて笑う国鉄のしらさぎの顔を、なんだか直視出来ない。どぎまぎと視線をそらしながら、しらさぎは伝えようと思つていた言葉を思い出した。

「あの、おめでとうございます。無事に運転を開始することが出来て、良かったです」

先ほどの勢いはどこへやら、気恥ずかしさが残っているせいでうまく声が出てこない。途切れ途切れの言葉を、国鉄のしらさぎは黙つてすべて言い終わるまで待つてくれた。

「ありがとう。予定より少し遅れたけど、こうして正式に国鉄の特急として君に会えて良かったよ。これから毎日この駅に停車するから、よろしくね」

目の前に大きな手が差し出される。真っ白い手袋をしたその手に、しらさぎは恐る恐る自分の手を乗せた。とたん、ふわりと手を包まれて、軽く上下に振られる。

兄であるくたにとする握手はもつと乱暴で、ぶんぶんと腕ごと大きく振るようなものだったので、その優しい

わたしのたからもの

握手に驚いた。それともこれが普通なのだろうか。しらさぎから見た国鉄のしらさぎはとても大人で、自分の周りにいる誰とも違っていった。

何より国鉄のしらさぎは、しらさぎの事を一人の人として扱ってくれる。大人は周りにたくさんいるけれど、北陸鉄道の間は兄の事もしらさぎの事も、子供扱いしている気がするのだ。職員や運転士にとつては我が子も同然の存在ということなのだろうが、時々それが鬱陶しく感じることもあった。

走り始めて二年目になり、仕事にも慣れてきた頃合いだ。確かに身体は小さいけれど、可愛いと頭を撫でられたい、お菓子をもらったりすることを喜ぶ一方で、もう子供じゃないと思う自分が心の中に生まれてきていた。

しかし、しらさぎと接している時だけは違う。彼は小さなしらさぎの頭を可愛いねと言つて撫でたりしないし、お菓子をくれたりもしない。そして、他の大人と決定的に違うのは、必ずしらさぎと同じ視線で話をしてくれるところだ。

「こ、こちらこそこれからよろしくお願いします……」
消え入りそうな声で、そう返すのがやつとだった。突然元気をなくしたように見えたのだろう、しらさぎが本当に大丈夫かと顔を覗き込んできた。ぐつと近づくと顔の

距離に、さらに鼓動が大きくなる。

その時。

「しらさぎに触るなあああー!!」

聞き慣れた声が聞こえてきたかと思うと、目の前にいた国鉄のしらさぎの身体が横に吹っ飛ばされた。もちろん誰がやったのかなど考えなくても分かる。

「おにいちゃん!!」

「しらさぎ、大丈夫か!」

倒れた国鉄のしらさぎの方など目もくれずにしらさぎの方へ駆け寄ってくる兄、くたにに対して思いつきり非難の目を向けた。が、兄はひるむ様子など無くがばりとしらさぎを抱きしめた。

「あいつ、しらさぎに近づくなつてこの前言つたのに……!!」

お前が心配で心配で、と大げさに言う兄を見てみると、ここ最近自分が子供扱いされていると感じる一番の要因はこの兄ではなからうか、としらさぎが思ったその時、倒れていた国鉄のしらさぎが起き上がった。

「もう、痛いなあ……あんまり続くようなら、停車駅変えてもらうように言おうかな」

ゆらり、とくたにの背後に立つと、その制服の首根っこを掴まえてぐい、と持ち上げる。くたには見る間にし

らさぎから離され、身体が宙へと浮いていった。

くたには兄とはいえ身体の大きさはしらさぎときさほど変わらず、身長が少し高い位だがそれも国鉄のしらさぎに比べればまだまだ低い。離せよと暴れる少年をドサリと床に下ろし、あー疲れたと肩を回すしらさぎは、先ほどよりも少しだけ顔が陰しく見えた。

「こう何度も蹴り倒されるような謂われはないはずなんだけどなあ……ちよつと上に掛け合うか」

またね、と手を振って、国鉄側のホームへと戻っていく国鉄のしらさぎの背中を眺めながらしらさぎは不安でいっぱいだった。

国鉄しらさぎのこぼした不穏な言葉、そして先ほどくたにに言った「停車駅を変えてもらおうか」という発言。

先ほどしらさぎたちの世話をしてくれている男性——山中線を含むこの加南線の責任者だ——が国鉄ホームからやってくる大勢の乗客を見ながら嬉しそうにしていたことを思い出したしらさぎは、あの、と国鉄のしらさぎの背中に向かって叫んだ。が、ちょうど上り方向のホームに列車が滑り込んできて、きしむ車輪や擦れる架線の音などでしらさぎの声はすっかりかき消されてしまい、国鉄しらさぎの耳には届かなかった。

振り返ることなく、上り列車に乗って行ってしまった

国鉄のしらさぎ。為す術無くその列車が発車していく様子を見ていたしらさぎに、どうしたんだと話しかけてくるくたにの声があまりにも脳天気だったので、

「おにいちゃんのばか!!きらい!」

と思わず叫んでいた。

最愛の妹に嫌いと言われたくたには、いつたい何が起きたのか分からず、怒って建物の中に戻って行ってしまった妹をただ見送るしかなかった。

「悪かったよ。もうしないから」

「……」

「なあしらさぎ。機嫌直してくれよ」

いつもの食卓。仕事を終えたくたにが戻ってきて、しらさぎはお帰りなさいの一言も発しなかった。相当頭に来ていろいろらしいと気づいた時には既に手遅れ、と言った状態だ。

くたにが必死に話しかけても何の反応も示さないしらさぎを前にして、ただ焦る気持ちだけが募っていく。一緒に暮らし始めてから一年、今までこんな事一度も無かったのだ。そして、くたにはいつたい何がしらさぎをそ

わたしのたからもの

これまで怒らせたのかということを理解していない。それをしらすぎは分かっていたから、くたにの口先だけの謝罪に対して、決して首を縦に振るつもりはなかった。

それから数日の間、くたにとしらすぎはまともに口をきかない日が続いた。普段の生活の中で彼らが一緒に過ごすのは朝と運転が終わった夜だけで、それ以外は大聖寺と終点の山中を交互に往復しているから顔を合わせる時間の方が少ない。けれど、すれ違いなどで顔を合わせれば互いに声を掛けたりしていたのだが、しらすぎはそれすらしようとしなかった。

くたにはもうどうしていいのか分からず——そもそも原因が分かかっていないのだから対策も立てようがない——途方に暮れていた。しらすぎはしよぼくれた兄の姿を見るたびに、許してあげようかと思いましたが、ここで許せばきつとまた兄は国鉄のしらすぎに対して同様の無礼を働くに違いない。そうなれば、しらすぎやくたに、そしてこの加南線全体の存亡に関わる事態を引き起こさねないのだ。

「……おにいちゃん、まだ何が悪かったか分からないの？」

あの日から四日経ち、今年も残すところあと二日となった。このままの状態では年越しをするのはすつきりしな

いと思つたしらすぎは、ようやくくたにに話しかけた。しらすぎから話しかけられたくたには一瞬驚いた表情を見せたが、すぐに顔をうつむけると、うん、と言った。

やっぱり何が悪いが分かかっていなかった。

がっかりしたが、これ以上黙っていてもきつとくたには自分でその原因を見つけることは出来ないだろう。しらすぎは私が怒っているのは、わたしだけの問題じゃないの、と言つて、その理由を話し始めた。

「国鉄の特急が走り始めて、雷鳥さんやしらすぎさんが大聖寺駅に停車するようになって、わたしたちに乗ってくれるお客さんは増えたでしょう？それだけ、あの人がちが停まつてくれるつてことは大切なことなのよ。それなのに、毎回会うたびにあんな態度を取つて、蹴りを入れたりなんかしていたら、そのうちあきれて停まつてもええなくなつちゃう。そうしたら、乗つてくれるお客さんも減つて、わたしたちいらぬ子になつちゃうかもしれないのよ？それでもいいの？」

一気にまくし立てると、くたには俯いたまま黙つてしまった。そして、

「……お前は、嫌じゃないのか？」

「何が？」

「あいつのこと。国鉄のしらすぎのことだ」

「別に嫌じゃないけど……どうして？」

「そうか。それならいいんだ。俺はただ、お前が嫌なんじゃないかって心配していただけだから……その、大人は苦手だつて、初めて会ったときに言つてたから……国鉄のしらすぎは、大人だろう？」

言われて、しらすぎは思い出した。初めて加南線へやつて来た時に、同じ年頃のくたを見つけて安堵した事。名古屋で生まれてからここに来るまで周りに子供は他におらず、大人の中でただ一人で過ごしてきたしらすぎは、兄であるくたと会つた時に、確かにこう言つたのだ。「もう大人の中に一人でいるのは嫌だ、大人は嫌いだ」と。

同じ年頃のくたにがいることが当たり前になって、子供として呼吸をする場所が出来たから、いつしかその恐怖心もどこかへ消えてしまった。そして、時が経つてすっかり忘れていたのだ。むしろ、自分やくたにの子供臭さを嫌悪するくらいになつていた事に気づいたしらすぎの背筋に、さつと冷たいものが走つた。

「そうだつたの……ごめんさい、おにいちゃん。わたしの事を考えていてくれたのね」

「でも俺も悪かつた。確かにいきなり蹴り倒したりすればあいつが怒るのも無理はないな。もうしないよ」

「うん。ありがとう……」

「でも、あいつが万が一お前の嫌がる事をして泣かせるような事があつたら、その時は容赦しないからな！」

ぐつと手を握りしめて宣言するくたにに、もう一度ありがとうと言つたしらすぎは、すつとくたにの方へ向かつて手を差し出した。

「なんだ？」

「仲直りの、握手」

そう言うと、くたには満面の笑みを浮かべて、しらすぎの手を取つた。ぶんぶんと大きく腕ごと手を揺らす握手はいつもと変わらない。だが、ふと、この前国鉄のしらすぎとしたような穏やかな握手を思い浮かべて、いつの間にか比較してしまつている自分がいることに、しらすぎはまだ気づいていなかった。